

世代を超えて持続する市民活動の 継承の構造についての考察

山村 美保里¹

¹学生会員 東京工業大学大学院 社会理工学研究科 博士課程 (〒152-0033 東京都目黒区大岡2-12-1, E-mail:yamamura.m.ac@m.titech.ac.jp)

環境保全や街づくりの市民活動は多数あるが、継続や世代継承は多くの団体の課題になっている。本研究では、長期に継続している市民活動の三事例に着目し、世代を超えて継承する要因を考察することを目的とした。各団体の経緯と活動に関わってきた関係者の来歴を時系列で検証し、その結果、発起人の幼少期の体験が市民活動誕生の契機になり、次の世代がその市民活動を幼少期に体験し、成人後に主旨を同じくする活動をする例がみられた。また発起人世代が、地域の言い伝えなどを大切にしていたことが、市民活動誕生に重要であったことも示された。

キーワード:市民活動, 社会関係資本, 長期継続, 継承, 縫ノ池, 古河総合公園, 湖浄連

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

良好な環境を保つことを目的とした市民主体の活動は、全国で様々に行われている。世代継承とは、上の世代の活動が下の世代に引き継がれていくことであるが、その実現が課題である団体は多い。

市民活動の研究は多岐にわたり蓄積されている。継続については、中島らが、社会福祉施設の関係者にシュミレーション実験をし、共感や満足などが活動継続に寄与していることを示唆し¹⁾、藤沢は長期に継続している活動には、規模、経費、広報に特徴があることを示した²⁾が、少数事例の結果にとどまっている。世代を超えた継承では、山村が市民による清掃活動が長期に継続している要因に、活動特性と地域の伝統行事の慣習の寄与があることを示したが、一地域の事例のみである³⁾。

近年注目されている社会関係資本(ソーシャル・キャピタル)の用語も使用されているが、本研究では訳語として一般的な社会関係資本で統一する)は、前世紀末には地域集団の観察からその存在と効果が指摘されてきたが、広く普及したのはパットナム以降といえる⁴⁾。パットナムは1993年にイタリアの各州の政策実現程度の違いを投票行動や市民参加等から導いた⁵⁾。社会関係資本は、信頼、規範、ネットワークとすることが多いが、資源、公共財、社会関係等を含むとする多様な見解もあり、また資本であるかにも議論の余地がある⁶⁾。市民活動との関係性では、パットナム⁷⁾や内閣府の調査⁸⁾などが、社会関係資本が多いほど市民参加が起りやすい等の関係性

があることを示唆している。定量化による研究は、植淵ら⁹⁾、栗島ら¹⁰⁾など多数あり、計測の方法も調べる用途によって確立されている。しかしそれらが世代を超えた継承がされているかに関する研究はみられない。

地域で行われている活動を、次の世代が受け継ぐ要因及び継承の構造を明らかにすることは、市民活動の世代交代の課題解決に寄与するものと考えられる。

本研究は、長期に継続している、佐賀県白石町の縫ノ池の水を守る湧水会(以下縫ノ池湧水会)、茨城県古河市の古河総合公園(以下古河公園)、下諏訪町諏訪湖の清掃活動を行う下諏訪町諏訪湖浄化連絡協議会(以下湖浄連)の三事例の活動に着目し、地域の特徴、活動の内容及び関係者の関わり方を比較することによって、世代を超えて継承される構造を考察することを目的とする。

(2) 研究の方法

2章で市民活動及び社会関係資本の先行研究を精査し、定義と特徴を抽出して、本研究の位置づけを行う。3章では、湧水会、古河公園、湖浄連について、地域の概要、市民団体設立の経緯、活動内容の概要を示し、4章では、三事例の共通の要素を抽出する。5章で、活動の世代を超えた継承について考察する。

各事例の整理と分析には、資料・パンフレット等と、それぞれの市民活動を行ってきた各代表者、関係者のヒアリング結果をデータとして用いた。ヒアリング調査の内容は表-1の通りである。

表-1 ヒアリング調査概要

| 事例 | 所在地 | ヒアリング | | | | 子ども時代を過ごした地域 | |
|--------|---------|-------------------------|----------------|--------------------------------|--------|--------------------------------------------|-------|
| | | 調査日 | 場所 | ヒアリング対象者 | 本文中心氏名 | | 概要 |
| 縫ノ池湧水会 | 佐賀県白石町 | 2016/8, 2017/6, 2018/12 | 川津地区公民館 | 湧水会代表 | A氏 | 湧水会の活動内容及び活動状況、湧水会設立の経緯、地域の歴史、A氏の子どもの時代の遊び | 縫ノ池近く |
| | | | — | — | B氏 | — | 縫ノ池近く |
| 古河公園 | 茨城県古河市 | 2017/7, 2018/7, 2019/7 | 古河公園 | 御所沼復元提唱、基本設計、パークマスター制度・円卓会議提唱等 | C氏 | 公園の設計とコンセプト、公園と市民との関わり | 東京古河市 |
| | | 2018/8, 2019/4,5,6,7 | 古河公園 | 市職員として公園実務担当、後に市民として円卓会議に参加 | D氏 | 市民活動の経緯、子どもの時代の遊び | 古河市 |
| | | 2018/8, 2019/4,5,6,7 | 古河公園 | もりもりクラブ代表 | E氏 | 市民活動の経緯、子ども時代の遊び | 古河市 |
| | | 2018/8, 2019/4,5,6,7 | 古河公園 | パークマスター | F氏 | 公園の市民活動と円卓会議、公園の維持管理 | — |
| | | 2019/4 | 古河公園 | どろんこクラブ立ち上げ/坂長館長 | G氏 | 古河公園の市民活動 | 古河市 |
| | — | — | ころりんプレイパーク立ち上げ | H氏 | — | 古河市 | |
| 湖浄連 | 長野県下諏訪町 | 2015/3/14 | 町庁舎内会議室 | 湖浄連代表 | I氏 | 活動概要、分担の仕組み、問題点、湖浄連と御柱祭との関係 | 隣接市 |
| | | 2017/11/15 | 町長室 | 下諏訪町長/湖浄連H5会長 | — | 設立当初と活動見直し時期の状況、湖浄連と御柱祭との関係 | 下諏訪町 |
| | | 2017/11/15 | 御柱館「よいさ」館内 | 湖浄連会員/現御柱館案内係 | — | 参加者の様子、御柱祭の特徴、湖浄連と御柱祭との関係 | 隣接市 |

2. 市民活動と社会関係資本の先行研究

(1) 市民活動

類似の用語には、政治的変革を目指した社会運動、環境悪化に対抗した住民運動、身近な問題の解決を目指した市民活動がある。本節ではこれらとは異なる含意を持つ市民活動について、先行研究を整理し来歴と特徴を明らかにする。

a) 先行研究

椎木は市民活動の用語が登場した背景を示した¹¹⁾。日本の市民活動は「日本の風土から生まれた独自の概念」であり、「市民の自発的・組織的社会参加活動、社会的課題の解決に取り組み、新たなコミュニティ形成への展開を内包した諸活動」と定義している。特性に、行政や企業セクターの影響が強く、思想背景は無思想であるが道徳的潔癖性を求め、協同組合の比率が高いことを挙げ、そうした傾向を持つに至った経緯を、戦前の団体の属性や目的、資金等の分析から明らかにしている。

道場は、先行研究と資料から1960-70年代に盛んになった住民運動が、その後収束していった背景と要因を示した¹²⁾。住民運動→市民運動→市民活動、のいわゆる市民運動の発展段階論に疑問を呈し、市民運動は地域エゴを克服した住民運動からの進化ではないこと、NIMBY施設反対の住民の抵抗は、公共の福祉と対立する概念ではないという考えなどを提示している。

藤澤は、新資料『アメリカ婦人の市民活動』（1951年富田展子著労働省婦人少年局発行）を解題し、その中で市民活動の特徴を以下に挙げている¹³⁾。身近な地域生活上の諸問題を自発的に解決しようとするグループ活動、ボランティアサービス、独立・中立で、政府に対する依存性、従属性がなく寄付元から自由である、パブリシティを活用する、団体運営技術を持つ、草の根レベルの団体の活動が連携して大規模な活動となることが本来の姿、などである。また30年以上続く自然保護団体へのアンケート調査による研究では、市民活動を「民間人が自発的

かつ自由に集まり、あるいはそうして作られた既存の組織に参加して行く、利他的・社会的かつ継続的・創造的な実践活動」と定義している²⁾。

松元は、道場の論説を発展させ、市民活動と類似の、社会運動、住民運動、市民運動等の言葉の生まれた背景と意味を丹念に調べ、市民活動の概念成立を明らかにした¹⁴⁾。それによると、社会運動は労働運動や農民運動等の思想背景を持ち、政党や組合などの組織の関与した社会の変革を求める行動で、住民運動は高度経済成長期の郊外や乱開発などへの反対運動で、ともに1970年代に衰退した。その理由を、経済成長終焉による社会の停滞によるとし、さらに運動関係者のウチ意識、内部分裂、地域エゴイズムによる社会的孤立などが影響したことを示した。これらの「住民運動」の負のイメージを脱却する言葉として登場した「市民」は、地域性とは関係が薄く、普遍的な価値を共有し、自立している特徴があるとす。 「住民活動」は、政府によるまちづくりや村おこしの活動を表彰するために用いられたことが始まりで、戦後禁止された隣組や町内会を再建する目的があった。1980年代に広まった市民活動は、市民による自発的な課題解決のために行政と協力関係を持ちながら行う行為とし、定義は椎木、藤澤らと概ね同様である。また市民活動は、社会運動、新しい社会運動、ボランティアアソシエーション、草の根、住民運動、など様々な発生源から成り立っていることを示した。その他では、清水¹⁵⁾が資金活動としての助成金獲得と活動目的の変化、補助金への依存と自立性の阻害の問題点を示している。

b) 市民活動の構成要因

前項より、市民活動は以下に集約できる。活動の発端が自発的で課題に対して自らが直接取り組む、活動対象及び目的は身近な社会的課題や地域生活上の諸問題である、目的の解決に時間を要するため活動の継続性が求められる、目的遂行のために行政と協力関係にあるが従属性はない、ボランティアによる参加、ネットワークキングの活用、パブリシティの活用、団体運営技術の保持の

である。多くの研究で重視されているのが課題への取り組みの自発性と、行政との協力関係、活動の目的が自立していることであった。また参加する市民は、社会運動や住民運動と異なり、組織や居住地によるものではなく、課題に関心や共感を持つことである。情報や交通網の発達に伴い、遠方に住む者でも課題に共感を持って共に活動する人も市民活動の市民である。一方、先行研究で活動対象が身近な地域生活上の事項に限られているのは、それまでの社会運動や住民運動との違いを明確化する目的があると考えられる。しかし今後の発展状況により、広域の社会問題を扱うことや、全国組織として共通の課題解決を目指すことはあることと思われる。

c) 市民活動の定義

前項までの整理によって、本研究では市民活動を「生活環境における課題に関心を持つ市民が自発的に、グループで行う長期にわたる活動」と定義する。行政と協働関係にあり、活動目的が自立していることも重要である。

(2) 社会関係資本

a) 社会関係資本の概要

社会関係資本に関する研究は、政治学、経済学、社会学、健康及び福祉分野等多岐にわたり、研究論文も多く、社会関係資本のどの側面に注目しているかによって定義や測定方法も多様であるといえる。しかし「人々や組織の間に生まれる協調的な行動を分析するという課題に取り組んでいる」ことは共通している⁶⁾。

まちづくりの分野における社会関係資本の定義はパットナムの「人々間の協調的な行動を促す『信頼』『互酬性の規範』『ネットワーク』」⁵⁾を用いることが多い。またデータは「一般的に人々は信用できると思いますか、それとも用心するに越したことはないと思いますか」等のアンケートによる回答の分析の結果や、市民団体やクラブへの参加率、投票率などを用いている。

社会関係資本には、異質なものを結びつけるブリッジング（橋渡し）型、同質な者同士が結びつくボンディング（結束）型があり、前者社会関係資本は結束を強化し、後者は異質な集団との結びつきや情報の伝播等に効果を発揮する。信頼は、社会全般に対する一般的信頼と、特定の人や組織に対する特定化信頼の二種類がある。経済格差や教育、平等性とも関係が確認され平等な社会は総じて社会関係資本が豊かで経済的格差の拡大は社会関係資本を棄損する⁶⁾。負の側面として部外者を警戒する排他性や反社会的勢力の外部不経済が指摘されている。

b) 市民活動と社会関係資本との関係

市民活動と社会関係資本は、先行研究において、社会関係資本の測定項目に市民活動参加の有無や頻度があるように密接な関係があるとされている。しかしパットナ

ムの用いた投票率や市民参加の度合いは、一部を表すことは可能だが必ずしも社会関係資本のすべてを説明できるものではないことも指摘されている¹⁶⁾。

また内閣府の報告書は、社会関係資本と市民活動との関係に着目し、市民活動の始まりと社会関係資本の誕生を、ネットワークの変化から検証した¹⁷⁾。調査対象事例は、身近な問題に直面した人が、リーダーとなって新しい人間関係を築きながら当該集団をまとめて課題解決していった例が紹介され、市民活動が社会関係資本を生み出すもとになっていることに言及している。

(3) 研究の位置づけ

市民活動の先行研究では、わが国固有の社会環境による変遷から導いた定義が試みられ、また具体的事例の活動状況を分析した研究も数多いが世代継承の課題は扱われていない。社会関係資本は、その重要性や機能、利点欠点が明らかにされ、誕生や蓄積についても説明が進んでいる。しかし時間経過による変化では、パットナムが社会関係資本の減耗を世代による違いと分析している⁷⁾ことに言及がみられるが、個人の持つ社会関係資本の量が減少したことを問題にしており、継承については研究対象になっていない。本研究は、長期に継続する市民活動を対象に、活動の世代を超えた継承に着目して、継承の構造を考察する点に新規性がある。

3. 三事例の比較

(1) 縫ノ池

a) 地域の概要

縫ノ池は、佐賀県白石町西部の杵島山麓にある約6000m²の池で、池を中心に集落が広がっている。水源は嬉野市南部経ヶ岳からの湧き水と言われている。池の中央には平安時代から続く巖島神社弁財天が祀られており、地域の人々からは「べんじゃーさん」と親しまれてきた。

白石平野は、古代より有明海に向けて干拓が進み、同時に常に灌漑用水の不足に悩まされてきた。昭和初期に電動ポンプでくみ上げ始めた地下水は、それまでの水源に比べ非常に簡便で広く利用された。しかし次第に汲み上げが過剰となって、1958年の干ばつ時に、縫ノ池の湧水は涸渇して池は干上がり、地域一帯は1mを超える地盤沈下を記録した。縫ノ池に水の無い40年間の間には、池の部分埋めて駐車場に活用する話も幾度となくあったが、地域の人々は「べんじゃーさんの池を埋めたら罰が当たる」と言い、そのままにしていた。

b) 市民団体「湧水会」設立の経緯

国と県による地盤沈下対策が計画され、1985年「筑

後・佐賀平野地盤沈下防止等対策」，1973年「筑後川下流白石平野土地改良事業」の地下水の代替水源確保の事業が行われた。2000年に嘉瀬川ダムから白石平野へ農業用水供給を開始し，同時に農業用の地下水利用を停止した。翌年2001年に池に湧水がみられ，水がたまり始めた。地区の人々の，水の湧く箇所を整備し水汲み場を作りたい，という声が契機となって2003年7月に「縫ノ池湧水会」が発足した。湧水会の会員は地区住民で構成されているため，弁財天の神事や農事に関わる共同作業によって，日ごろから密接な関係を築いている。

c) 活動内容

湧水会は「湧水を守り，縫ノ池を地域住民の憩いの場・交流の場作りを行うと共に，縫ノ池の自然環境の保全，縫ノ池や巖島神社の歴史や文化を大切に，豊かな住みやすい地域づくりを行う」ことを目的に，2004年から本格的に活動を始めた。湧水会主催の主な行事は，盛夏の「キャンドルナイト」，晩夏の「釣り大会」，秋の「茶会」，冬の「生き物調査」等である。2017年に新たに蛍の飼育を開始した。2003年に川の日ワークショップに参加してグランプリを受賞し，以降も様々な表彰を受けて，視察や見学者が多数訪れている。2017年3月に，地区の女性が，縫ノ池弁財天での挙式を希望し，前例は無かったが地区の人々や神社の協力を得て実現させた。

(2) 古河総合公園

a) 地域の概要

古河総合公園の所在する茨城県旧古河市(2005年に総和町，三和町と合併)は，渡良瀬川が荒川に合流する地点の北西にある。縄文遺跡が点在し，万葉集にも歌われている古くから開けた地域だが，歴史の資料に登場するのは室町時代の古河公方が御所沼のほとりに館を設け，渡良瀬川流域に広大な荘園を有した頃からである。江戸時代は渡良瀬川河畔に古河城が建てられ譜代藩が治めていた。一帯は湿地や谷戸が多く，水運が発達していたが，水害も多く，明治期になると渡良瀬川改修工事が始まった。1912年に古河城が取り壊され，渡良瀬川の流路が変わり，戦後は沼や谷戸が次々に埋め立てられて住宅や水田になった。御所沼は1950年，公方様の森を残して水田になったが，1970年の減反政策後は打ち捨てられ，ゴミがたまり異臭を放つようになった。

b) 古河総合公園「円卓会議」設立の経緯

1933年に古河公方館跡等が，県の文化財に指定され，1972年に御所沼と公方様の森一帯が古河総合公園として都市計画決定された。さらに1989年に御所沼の一部を復元する計画に変更し，1996年に完成した。

古河公園では，市民それぞれの思いのままに公園を楽しむことができるように，市民と行政をつなぐ「パーク

マスター」と，公園の維持管理や運営の方針を話し合っ
て決める「公園づくり円卓会議（以下円卓会議）」が設
けられた。円卓会議には，行政，パークマスター，専門
家の他に，公園で市民活動をしている団体や，興味を持
った一般市民も参加している。

c) 公園での活動と円卓会議

パークマスター制度と円卓会議は発足後に良好な活動を
続けていたが市の合併後に一時停滞し，2018年4月よ
り復活した。公園では，実行委員会が組織される大規模
イベントの桃まつり，新茶まつり，よかんべ祭りのほか，
子どもたちの田植え体験の「どろんこクラブ」，公方様
の森の整備を市民で行う「もりもりクラブ」，幼児たち
が好きなように遊べる「ころりんプレイパーク」など多
様な団体と，植物観察会やきのこ栽培，梅の実取りと販
売など様々な小規模な自発的活動がある。各活動の代表
者は円卓会議に参加し，活動のお知らせや次年度の予定，
新企画の相談などが行われてきた。

(3) 下諏訪町湖浄連

a) 地域の概要

長野県の中央部，諏訪湖に面した下諏訪町は，9割が
山林で，集落の大半は湖畔の平地部に集中している。町
の東部には，諏訪大社秋宮の2社が鎮座し，旧中山道と
甲州街道が交差する温泉宿場町として栄えてきた。明治
以降に製糸業，戦後に精密機械工場が盛んになった。

諏訪湖は，冬期に湖面が盛り上がる御神渡りのある神
聖な湖であり，また魚を取り冬にスケートをする湖とし
て地域住民に親しまれてきた。一方，流入河川の31本に
対し流出河川は天竜川1本で，深度も浅く水害に悩まさ
れてきた。水害対策の一環で1967年に護岸がコンクリー
ト化し，また沿岸の工場排水と家庭排水の流入によって，
湖水は悪化した。

b) 市民団体「湖浄連」設立の経緯

諏訪湖の水質改善のために，1969年より湖底の浚渫，
1970年より公共下水道事業計画が策定され，順次実施さ
れたが，水質改善の成果が現れるのは1980年代後半であ
る。湖水の汚れている1978年に開かれた長野国体では，
諏訪湖でボート競技が行われ，地域の人の「もっときれ
いな湖に迎えたかった」という思いがきっかけとなり，
自分たちでできることを始めようと，地域の青年会議所
が中心になって諏訪湖の清掃を行う湖浄連が誕生した。

c) 活動内容

湖浄連の主な活動は，設立時から毎年恒例で行われて
いる活動と，一定期間開催して終了した活動とがある。
前者は，月に1度の湖岸の清掃活動と，7月の企画イベ
ントのクリーン際，環境について学ぶ講演会で，後者はレ
ガッタ豚汁サービスや親子ボート競走などである。

清掃活動は春秋に行われる下諏訪町主催の町内一斉清掃とも連動し、町から補助金等様々な支援を得て続けら

れている。1997年にコンクリート護岸から自然護岸への改変が行われたが、その頃には水質も改善し湖浄連の活

| 西暦 | 元号 | 縫ノ池 | | 古河 | | | | | | | | 下諏訪 | | | | | |
|------|----|-----|-----|-----|----|---------|----------------|-----------|----|----|----|-----|----|-----|-----|-------|----|
| | | 出来事 | 湧水会 | 関係者 | | 御所沼の出来事 | 円卓会議とパークマスター制度 | 公園管理運営参加者 | | | | | | 出来事 | | 関係者 | |
| | | | | A氏 | B氏 | | | C氏 | D氏 | E氏 | F氏 | G氏 | H氏 | 諏訪湖 | 湖浄連 | 発起人世代 | I氏 |
| 1938 | 13 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1939 | 14 | | | | | | | 誕生 | | | | | | | | | |
| 1940 | 15 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1941 | 16 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1942 | 17 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1943 | 18 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1944 | 19 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1945 | 20 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1946 | 21 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1947 | 22 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1948 | 23 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1949 | 24 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1950 | 25 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1951 | 26 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1952 | 27 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1953 | 28 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1954 | 29 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1955 | 30 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1956 | 31 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1957 | 32 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1958 | 33 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1959 | 34 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1960 | 35 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1961 | 36 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1962 | 37 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1963 | 38 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1964 | 39 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1965 | 40 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1966 | 41 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1967 | 42 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | 43 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | 44 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | 45 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | 46 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | 47 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | 48 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | 49 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | 50 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | 51 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | 52 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | 53 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | 54 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | 55 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | 56 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | 57 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | 58 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | 59 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | 60 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | 61 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | 62 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | 63 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | 4 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | 5 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | 6 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | 7 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | 8 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | 9 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | 10 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | 11 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | 12 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | 13 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | 14 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | 15 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | 16 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | 17 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | 18 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | 19 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | 20 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | 21 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | 22 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | 23 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | 24 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | 25 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | 26 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | 27 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | 28 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2017 | 29 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2018 | 30 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2019 | 31 | | | | | | | | | | | | | | | | |

図-1 三事例の活動内容と関係者の年表

動目的は達成され、活動の継続如何が検討されたが、目的を見直して継続することを決めた。組織は、地域の様々な団体の集合体で地域の慣習により各役員が毎年変わるため、一人一人の関わりは小さいが、担い手は継承されている³⁾。

4. 三事例の共通の要素

(1) 経緯

前章の三事例は、地域環境の変化や市民活動の設立の経緯に共通の展開がある(図-1)。高度成長期前の豊かな自然環境があった時期、高度成長期の環境の激変と悪化の時期、公共事業による問題の解決、回復した環境を守る市民活動の誕生、活動の継続に区分できる。

また、縫ノ池の弁財天、古河公園の公方様の森、諏訪大社の祭礼に関わる祭りや湖など、環境が悪化していた時期も変えることなく大切にされてきた場所があることが共通している。また縫ノ池弁財天と諏訪大社の神事祭礼は続けられていた。

(2) ネットワークの広がり

活動を行う中で様々な人や団体との関わりを持ち、広げている。縫ノ池湧水会は、川の日ワークショップでの参加を通じて、水辺で活動する全国各地の団体と知己になり、その他にも様々な表彰されて活動が知られて各地から見学者が訪れ、ネットワークを広げてきた。古河公園は、計画段階から大学の研究室が関わり、レストラン棟を妹島和世氏が、管理棟を内藤廣氏が設計をするなど地域以外の関係者が多く参加している。また開園後も他地域からの視察やインターン、小学校から大学まで各種学校の野外授業や見学などの来訪が多く、海外との交流も行われてきた。円卓会議は出席者からの誘いで新たな参加者が増えるなど、人のつながりの誕生の場になっている。湖浄連は、団体設立時から環境に関する外部講師を招いての勉強会や、シンポジウムの開催や他所での会の参加などを続けている。「活動に飽きがないように」「参加することで様々な刺激をもらえる」(I氏2015)の効果をねらい参加している。

(3) 活動の目的

湧水会は、キャンドルナイトや生き物調査などの子どもたちを主体にしたイベントを企画し継続しているが、これは子どもたちが池での経験を重ねながら成長してほしいとの願いによる。一度水の失われてしまった池が、二度と同じことにならぬように、次世代に水の大切さを伝え、地域の中の池を守っていく心を育てることが、最

終的な目的となっている。古河公園は開園当初から、公園での活動を自発的に行うことを積極的に推奨している。花壇への花苗植え、森の管理、公園内の樹木の手入れなどは、高齢者が主体の活動が多い。子どもたちが自由に発意して遊ぶことを支援する目的で作られた「どろんこクラブ」や「ころりんプレイパーク」では、親子参加の企画がされている。円卓会議は、行政の管理のもとでは禁止事項が多くなりがちの中、参加者それぞれの責任において自由に公園との関わりを作り、人生の時間を過ごしてもらえる場にしてもらうことが目的である。湖浄連は、設立当初はゴミを減らすことが目的であったが、1990年代に活動を「ゴミを拾う人はゴミを捨てない」「子どもたちに拾っている姿を見せ続けることが大事であり地域の育てである」と位置づけ、人を育てるための活動として、物理的なゴミの除去から、人育てへと目的を変えて継続させてきた。

(4) 設立時関係者の子ども時代と次世代の環境の変化

三事例の発起人及び設立時の関係者を、本研究では第一世代とよぶこととする。第一世代が子ども時代に体験した自然環境と、次世代が体験する環境は異なっている。現代の日本では、水の事故への懸念から子どもたちだけで水辺で遊ぶことは希になったように、三事例でも水辺での遊びは周囲を歩くか、ひざ下程度での水遊びで、いずれも保護者同伴が一般的である。御所沼と諏訪湖には水生生物は外来種が増え、かつての生態系とは異なる。

一方、それぞれ地域の環境が悪化する前に子ども時代を過ごしている第一世代は、子どもたちだけで泳ぎ、近隣の山や林で材料を集めて釣りやその他の遊びをし、取った魚や貝は家庭で食べていた。以下に第一世代の遊びと、次世代の体験の環境とを概観する。

a) 縫ノ池湧水会

湧水会の実質的な実務と運営は、発足当時から16年間担っているA氏の子ども時代は、「学校から帰ったらみんな池に集まっているような遊びを、池で泳ぎ、竹藪から竹を採ってきて筏を作って乗り、境内で缶蹴り、陣取りゲームをしました」「釣りは、夜釣りがいい。大きいナマズや鰻が釣れました。夜はいっぱい人が来た」「私が小さい時はここに蛍がいっぱいいました」(A氏2018)であった。復活後の池は、地盤沈下の影響によって深は浅くなり、子どもたちはひざ下程度の水深の池で水遊びをしている。池の魚や貝を食べることはないが、湧水を汲む場を整備したので、多くの人々が汲みに来ている。

b) 古河公園

戦前の豊かな自然の中で過ごしたC氏は、「さなぎを刺した釣り糸を、ありあわせの篠竹の先に結んで水面に垂らすと、おもしろいように魚が食いついた」「土地の

人が御所沼と呼ぶこの沼は、街の子どもたちの作戦行動圏の外側に伏していた。子どもらが（略）進軍するのは、中秋にそなえる秋草狩りに出かけるときにかぎられていた”¹⁷⁾と著書に記している。円卓会議に参加しているE氏は“私が小学校の間は虚空蔵様から管理棟の辺りまでは遊び場だった。季節の折々にお月見、ヨモギ、キノコ採り、虫やおたまじゃくし探しなど、生活の場であり遊び場であり、私の生い立ちの中で積み重なっている場所(E氏2018)”と語っている。

現代は、身近な湿地や谷戸は消失し特別な場所であった御所沼が明るい公園になった。沼に流入する水系は変わり、かつては豊富な湧き水が沼に集まっていたが、公園化後は井戸で水を汲み上げ、浄化した下水と雨水を集めて沼へ流している。子どもたちが遊べる水辺は園内に整備した水遊び場で、生き物を取って遊ぶことはしない。

c) 湖浄連

湖浄連の発起人となった世代の5～18歳は、1945～1955年で、諏訪湖は神聖な美しい湖であった。発起人関係者は高齢で話を聞くことができなかったが、資料に当時の様子を知ることができる。“スキー・ソリ・スケートなどの雪や氷を用いた遊び、竹馬、棒ベース、戦争ごっこ、メンコ、草花の首飾り、お手玉、盆花とりなど”“おかずやおやつの採取を兼ねた遊びも多く、魚とり、サワガニとり、タニシとり”¹⁸⁾。また町政覧には1950年のスケートで遊ぶ様子がある¹⁹⁾。護岸は、現在は自然護岸になっているが、地中には堅固なコンクリートが入っている。

5. 考察

(1) 三事例と市民活動

本節では三事例が活動が市民活動であるかを検証する。2章で市民活動を「生活環境における課題解決に関心を持つ市民がグループをとなって自発的に行う長期にわたる活動」と定義した。まず自発性では、縫ノ池湧水会と古河公園の関係者は、強制ではなく自らの意思で参加してその団体のコミュニティを形成している。湖浄連は、地域住民としての責任感から活動に参加している傾向が強かった。活動目的は、湖浄連は汚れた湖をきれいにするという問題の解決が設立の動機であったが、縫ノ池と古河公園の御所沼は、改善された環境を守っていく目的の活動団体として誕生した。その後も課題に関心を持つ人々と協同で、また他所とネットワークを形成して、18～40年という期間継続している。課題に関心のある市民が、グループで自発的に長期に活動を継続している点は同様で、市民活動といえることができる。

(2) 世代を超えた継承

a) 第一世代の遊びと活動

第一世代は、水辺での遊びの体験が豊富である。子どもたちだけの集団で、水の中で泳ぎ、魚を釣ったり、山や林で山菜やきのこを取ることを楽しみ、また取ったものを家庭に持ち帰って食べていた。成人後にそれらの経験をなつかしみ、一度失うことによってその貴重さを認識した。縫ノ池湧水会の活動はその楽しさを今の子どもたちに伝えたい思いが動機であり、古河公園は市民がやりたいことを実現することを支援し、湖浄連ももつときれいな湖であったはずという思いが活動誕生の発端になっていた。つまり、発起人の第一世代の子ども時代の経験が、活動の発起の重要な要因であるといえる。

b) 信仰心

第一世代は、古い言い伝えや神々が身近にあって畏敬の念を育みながら成長しており、それらの信念に背く行為に抵抗を感じることもある。

縫ノ池では、水が涸れた池を駐車場にする話は「池を埋めたら罰が当たる」という意見によって何度も見送りとなった。もし弁財天への畏怖の気持ちがなければ、便利さを優先し地区の中心にある池は駐車場になっていたであろう。埋めてしまっていたら湧水が復活しても池の景色は戻ることはなかった。古河公園では、古くから豊かな水田へのあこがれは強く、沼を埋め立てて田んぼ化することに大きな抵抗がなかったが、古くから地域の人々が大切にしてきた公方様の森は変えなかった。沼を埋めるために森の土を切り崩せば手軽であったが、地域の人々の森への気持ちを鑑みて残したという(E氏2019)。40年後に森の周りに沼が再現したが、もし公方様の森が残っていなければ、1989年の御所沼復元決定はなかったであろう。湖浄連は、諏訪大社秋宮の御柱祭を中心とした祭りが地域の暮らしの基礎となっている。諏訪の神様を慕う気持ちが、多くの行事を支え、湖浄連の活動も影響を受け、長期に継続する要因になっている³⁾。

このように、地域の人々に畏怖や畏敬の念とともに大切にされてきた場所は、環境が変わっていく中でも残されてきた。環境が改善された時に、それらの場が地域の人々の中心や拠り所になって市民活動が誕生している。そして第一世代の畏怖や畏敬の念は学んで身に着けたのではなく、日常生活での行いや季節ごとの行事を通して、それらの心が生まれ、環境の変化の中でも地域を大切に思う心になって活動することが可能となると考えられる。

c) 新しい環境の活動を体験した世代

第一世代が行った市民活動を、子ども時代に体験した次の世代は、その活動や地域に対してどのような思いを持っているであろうか。以下、三事例を検証する。

縫ノ池の弁財天で挙式した女性は、池の夏のコンサー

トで歌い、日々池に親しんで成長し、思い出の詰まった大好きな縫ノ池で挙げたかったという。家庭の事情で現在は地域を離れているが、もし地域で暮らしていたら、湧水会の活動に何らかの関わりを持ったと思われる。古河公園では、地域出身者のG氏が立ち上げた「どろんこクラブ」は、田植えや稲刈りのほかにも子どもたちの発案で様々な遊びを行うもので、約10年間続けてきた。しかし市の合併後に企画内容が変わり、市民に広く開かれたクラブとなるために、予め決めていた内容を行うクラブになった。自由な古河公園で遊んできたH氏は、子どもたちが好きなように体験できる遊びが大切だと考え「ころりんプレイパーク」を立ち上げた。これは、団体活動の継承ではないが、活動の主旨及び考え方を継承していると考えられる。現在の湖浄連代表は、物心ついたときには湖は汚れていたが、成人して活動に携わり活躍している。その背景には清掃活動は人づくりという活動目的への共感がある（I氏2015/3）。

第一世代による体験の提供によって、子ども時代に経験や思い出を積んだ次の世代の中に、成人後にその場所と関わりを持ちたいという思う人がいるといえる。

d) 世代を超えた継承の一構造

本研究の事例では、それぞれの事例で状況が異なり、世代を超えた継承の要素も一様ではない。しかし地域の市民活動を体験した子どもたちの中に、成人して市民活動に参加する、という一つの継承の構造をみる事ができた。継承の背景にある、その場所を大切に思う心が育まれていることは共通であった。縫ノ池湧水会は、子ども時代に池に親しみ挙式した女性は、池と弁財天を敬う心を受け継いでいる。古河公園では、子どもを自由に遊ばせる第一世代の企画で楽しい経験を重ねた次世代が、その下の世代の子どもたちを遊ばせる活動を始めていた。湖浄連は、町民は一度は会員となって一定期間活動を行い継続している。形は異なるが、それぞれ第一世代の思いが次の世代へ継承されていると考えられる。

またどのくらいの継承を長期継続といえるかであるが、子ども時代の5～18歳で活動を体験して成人し、活動を支える側になる30代になるには12～25年前後要する。第一世代から、世代を超えた継承を果たすためには、楽しい思い出を積み重ねた子どもが成長するまでの20年前後の継続が必要であり、その期間継続した活動を世代を超えた長期継続と呼ぶことができるものと考えられる。

6. おわりに

三事例の第一世代は、みな子ども時代に豊かな自然体験をし、神々や公方様を大切にすることを育みつつ成長し

た。当時は、テレビもゲームもスマホはもちろん電話もない時代で、自然の中で遊ぶしかなかったという。しかしそれらの世代が、改善された各環境に対して、守り伝える行動を続けている。一見、得にならないような利他行為であり、その活動が地域に新しい活力を与えていると思われる。次世代が成長したとき、どのような地域となっていくのか、それは今の地域の子もたちが、どのような体験を積んでいくかによるものと思われる。

参考文献

- 1) 中島聡子, 中井豊, 古宮誠一: エージェントベースシミュレーションを利用した市民活動継続要因の考察, 情報処理学会論文誌, Vol. 46, No. 1, 2005
- 2) 藤澤浩子: 自然環境保全分野における市民活動とその長期継続要因, The Nonprofit Review, Vol. 10, No. 1, 2010
- 3) 山村美保里: 世代を超えて持続する市民活動の長期継続要因に関する研究, 土木学会論文集, No. 75, No. 1, pp. 1-11, 2019
- 4) 宮川公男・大守隆: ソーシャル・キャピタル現代経済社会のガバナンスの基礎, pp19-31, 東洋経済新報社, 2004
- 5) ロバート・D・パットナム・河田潤一訳: 哲学する民主主義—伝統と改革の民主的構造, NTT出版, 2001
- 6) 稲葉陽二: ソーシャル・キャピタル入門, pp. 23-39, 中公新書, 2011
- 7) ロバート・D・パットナム: 孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生, 柏書房, 2006
- 8) 内閣府経済社会総合研究所: コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書, 2005
- 9) 植淵知哉, 市田行信・平井寛・近藤克則: ソーシャルキャピタルと地域コミュニティの歴史—旧版地形図を利用した大規模アンケートの分析, GIS理論と応用, Vol. 2007
- 10) 栗島英明, 佐藤俊, 倉坂秀史, 松橋啓介: Resource generator による地域住民のソーシャル・キャピタルの測定と地域評価との関連分析—千葉県市原市を事例に, 土木学会論文集G, Vol. 71, No. 6, 2015
- 11) 椎木哲太郎: 日本型「市民活動」の源流 1868—1951, 経営・情報研究No. 7, 2003
- 12) 道場親信: 1960—70年代「市民運動」「住民運動」の歴史的位置—中断された「公共性」論議と運動史的文脈をつなぎ直すために, 社会学評論, Vol. 57, No. 2, 2006
- 13) 藤澤浩子: 1950年代「市民活動」の発見—『アメリカ婦人の市民活動』解題, The Nonprofit Review, Vol. 7, No. 2, 2007
- 14) 松元一明: 「市民活動」概念の形成—近接概念との関係性と時代背景を中心に, 法政大学, 2011
- 15) 清水亮: 国土のランドデザインと市民活動—震災復興の現場からの問題提起, 地域社会学会年報第29集, 2017
- 16) 内閣府国民生活局市民活動促進課: 平成14年度 ソーシャル・キャピタル: 豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて, 2003
- 17) 中村良夫: 湿地天性の記, 岩波書店, 2007
- 18) 浦山佳恵, 富樫均, 畑中健一郎: 語りから見た戦前の信州の里山の暮らし, 長野県環境保全研究所研究プロジェクト成果報告書, 2006
- 19) 下諏訪町企画課: 下諏訪町勢覧町政90周年記念, 1983